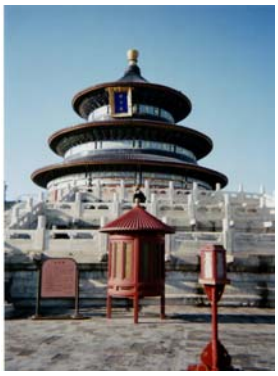
外国語のススメ （教員コラム） 平成23年度バックナンバー

※執筆者の所属・職名は掲載当時のものです。

【第24回】 断想

法学部准教授　前川　　亨　（中国語担当）



先日、テレビの「日曜討論」なる番組を見ていたら、某大学で中国現代政治を教えている某教授がこんなことを言っていた。「自然と人間とが一体になって生きるという哲学は中国にない日本独自のものだ。日本はこれを今後活かしていくべきだ」云々。これを聞いて私は唖然とした。中国の伝統思想の主流が天人相関、もしくは天人合一（ここでいう「天」とは自然界のこと）であって、自然界と人間界とを分ける発想の方が異例に属することは常識といってよい。この中国人（漢民族）の世界観は、モノを数える時に生物と無生物、人間とそれ以外とを区別しない現代中国語の量詞の用法にも生きている。（例えば現代中国語では「人」と「リンゴ」は同じ量詞で数える。「一個人」、「一個苹果」。）むしろ日本語の方が、人間とそれ以外とに明確に線を引いて区別する言語なのだ。（「人」を数える時は「人」、「リンゴ」を数える時は「個」。「人」については「いる」、「リンゴ」については「ある」を使い分ける。）

その某教授は現代中国の政治事情に明るく、中国語も達者な筈である。それにもかかわらず、なぜあのような発言をしたのだろうか。そこには意外に深い問題があるように思われる。

現代中国の変化は余りにも大きく、日々流動する情報をフォローするのも並大抵ではない。いわゆるチャイナウォッチャーが活躍する所以である。この場合のチャイナはもちろん現代の中国のことをいう。しかし、アメリカの専門家、ヨーロッパの専門家などと並んで中国のことを語ろうとする場合には、どうしても中国の伝統的な価値観や世界観に踏み込まざるを得なくなる。それで、よく考えもしないで俗耳に入り易い怪しげなドグマに凭れ掛かってしまうのだ。また、彼らにとって中国語とは単なる技術であって、そこから中国人の思考様式や生活感覚を読み取ろうというふうには思わないのだろう。

現在、英語以外の外国語の中で「我が世の春」を謳歌しているかにみえる中国語だが、学生の関心が余りに「今」に限定されていることに危うさを感じる。それでは所詮、底の浅いものにしかならない。かつては「中国抜きの中国読み」とか「中国なき中国学」などと揶揄されるほど、「中国」というと伝統的な中国のみを指した時代もあった。しかし、今や時代は逆転した。私は現代中国に関心をもつ若者たちにこそ、「今」に限定されない中国全体に対する視野を持って貰いたいと切望している。

All the photographs: Copyright(C) Toru Maekawa 2012

（2012.03.15）

【第23回】 Fish and chips or sushi

経済学部准教授　ライアン, スティーブン　（英語担当）

As a teacher of English born and brought up in England, I have always been fascinated by how the rest of the world uses 'my' language. For most of my life this has been a great advantage: I have been able to travel around the world with very few communication problems; I have been able to make friends with people from various different countries; and I have been able to take part in numerous international professional events. However, in recent years I have started to wonder how much this is still 'my' language. This is something I especially notice whenever I return to the UK.

Recently I was in London to see in the new year. I was there to watch the New Year Fireworks display. This was a great international event with a crowd of over 250,000 people gathered by the River Thames to watch the spectacular Olympic year show. It was a surprisingly warm evening; I was able to walk around on new year's eve in a sweater without a jacket or coat. As I walked around, I noticed something very interesting. There were all kinds of people in the huge crowd and they were doing all kinds of things: some were singing; some were fighting; some were taking photographs; and many were getting drunk. The interesting point was that they were doing all of these things in so many different languages. Everybody around me seemed to be speaking a different language, but nobody was speaking English. The only English words I heard in over two hours in a crowd of over a quarter of a million people in central London were shouts of "Happy New Year!" as Big Ben struck twelve and the fireworks began.

As I looked and listened to the crowd, I wondered who was the real Londoner? Was it me, someone born in London but who hasn't lived there since 1990? Or was it those people in the crowd who came from all parts of the world but were now living, working or studying in London? The answer must surely be that those other people have more of a connection to the real London than I do. The London that I come from does not exist any more and belongs to the past; the London of the twenty-first century is a very different place to the one I grew up in, influenced by people and cultures from all over the world.

Perhaps I notice the rapidly changing culture most of all when it comes to meal times. One of the things I most look forward to when I go back to the UK is eating all my favourite foods. Unfortunately, these days hardly anybody in England eats the dishes I love so much. My favourite meal in the whole world is 'pudding 'n' chips'. As I was growing up I think I had this almost every Friday; it was cheap, filling and unbelievably tasty. (If I were free to choose now, I would probably eat it every day for the rest of my life. It really is that good.) However, for many children growing up in England nowadays this is probably an exotic dish. For example, my thirteen-year-old nephew is more familiar with sushi than fish and chips. In fact, he's never eaten fish and chips in his life. I felt something similar at Christmas. I wanted to eat a traditional Christmas dinner of 'turkey with all the trimmings', but my family, like many English families, no longer wants to eat the traditional food; they prefer something new to what they see as the boring, traditional dish.

So what does all this mean for me as a teacher of English and, more importantly, for students? Well, it suggests that it is important to understand that cultures are constantly changing. And so are languages. For teachers and learners there is no point in looking at models of language and culture that belong to the past, unless we are studying the history of language and culture. Language learners need to understand what is happening now. Just as sushi is as much a part of the modern English diet as fish and chips, new vocabulary and patterns of intonation developed by young people in Asia or Africa are a part of twenty-first century international English. Learning a language is about more than simply picking up a collection of words and grammatical structures. There is an important psychological side; in order to use a language effectively, learners need to feel like they belong to the community speaking the language. Learners of English need to think about which community of English speakers they are hoping to join because this affects what and how they learn. Perhaps one way to think of this is to imagine a visit to London; where would rather go, to afternoon tea with a group of other tourists that you'll never meet or speak to again or to a busy sushi restaurant full of other young people, some of who may become lifelong friends?

I started by describing English as 'my' language and I'd like to finish by suggesting that an important step for anyone serious about learning English is to begin believing that English is just as much your language as it is mine.

1. London: Happy New Year!
   Copyright Chris Downer and licensed for reuse under this Creative Commons Licence.
   http://www.geograph.org.uk/photo/2747109より転載
2. 3Copyright Stephen Ryan 2012

（2012.01.31）

【第22回】 語学はスキル科目か？

LL研究室長・経済学部教授　寺尾　格（ドイツ語担当）

外国語を学ぶというのは、しばしば勘違いをしている人も多いのですが、単なるスキルを学ぶことではありません。スキルが必要ないと言っているのではなくて、「単なる」スキルでは捉えきれないのが「外国語学習」だということです。そもそも「言葉」に関わるすべてについて同じ事が言えるのですが、たとえば＊＊学を学ぶということは、＊＊学の知識や考え方を、＊＊学の「言葉」を用いて説明する力を身につけることです。どんな知識や技能であれ、「身につける」ためにはスキルが必要ですが、「スキル」を超えるような視点を確保していなければ、そんな目先のスキルは、実は役には立ちません。資格というスキルを取ることだけが目的の「専修学校」と「大学」との相違も、このあたりが重要なところです。

「外国語のススメ」の他のコラムをお読みいただければ、外国語を通して未知の世界が広がることは、誰にでもすぐに「わかる」ことです。そして「わかる」ためには、「分ける」ことが必要となります。その役割を担う土台に「言葉」があります。これを難しく言えば言語の「分節機能」と言います。「文節」と混同しないでください。われわれは「言葉」により「切り分ける＝分節」機能無しに、複雑な外界や内面を「わかる＝分ける」ことはできないのです。外国語を学ぶとは、言葉の「分ける＝わかる」という認識のありようの言語的・社会的・文化的相違に意識を向けることが、最も重要なカンドコロなのです。

例えば「責任」という言葉があります。英語では何と言うでしょうか？ responsibility ですね。単語カードというスキルでの「暗記」ならば、これで十分なのですが、もう一歩「認識」を深めてみましょう。これは一体どういう意味なのでしょうか？
日本語の辞書を覗くと、「しなければならない任務」と説明されていました。なんだか大変そうです。そもそも「責」という言葉自体が「せめる」「とがめる」という意味の方向ですから、「責任」とは「耐える」こと、あるいは可能ならば回避したいような「重荷」「苦しみ」の消極的なイメージが、どうも日本語にはついて回るようです。

それに対して英語の responsibility は、名詞の response に可能の接尾辞　–bility をつけた言葉です。ですから英語の「 責任 / responsibility 」を文字どおりに理解すれば、「返答可能性」ということになります。「返事ができる」ということですね。

ところでドイツ語では「責任」を Verantwortung と言います。接頭辞や接尾辞の細かな説明を省けば、真ん中の Antwort（アントヴォルト）が意味の中心です。これは英語の response と同じ「返答」という意味です。ただし最初の Ant とは英語の anti と同じく「反対、対抗」の意味で、次の Wort （ヴォルト）は「単語、言葉（word）」の意味ですから、ドイツ語では「言葉にする」というニュアンスが明瞭ですし、さらに「言葉」を「対抗」するのですから、これは誰かの「言葉」に対して別の「言葉」を返すこと、つまり「対話」という「責任」の実質が、ドイツ語では誤解の余地なく明瞭に見えています。

英語でもドイツ語でも、単に「腹を切ること！」で「責任」が終わってしまう訳ではありません。あるいは一方的かつ権威的に物事を進めるのではなくて、きちんと相互に「言語化」し、「対話」の努力を惜しまないこと、それこそが「責任」なのだということが、よく「わかる」のではないでしょうか。

（2011.12.16）

【第21回】 drop out と drop in on

法学部教授　高橋 勇夫　（英語担当）

上野動物園で猿を見ていると、他の猿たちとあまり交わらず、すねて仲間に背を向けている猿がいる。ときどき小猿がじゃれてきても歯を剥いて追い返す。大 人げないことこの上ない。しかしじっと佇む彼の背中には、意地と悲哀が交々（こもごも）に漂っている。ドロップアウトした猿だ。仲間の猿たちは彼を避けて 通る。さぞかし付きあいの悪い、イヤなやつなのに違いない。

アップルのスティーヴ・ジョブズが2005年にスタンフォード大学の卒業式で行った有名なスピーチは、ドロップアウト drop out の話から始まる。養父母がコツコツ蓄えた貯金が大学の学費の支払いであっという間に底をつくのにいたたまれなくなって、ジョブズは半年かそこらで中退して しまう。けっきょく彼は高等教育を受けないままに終わるのだが、それでも自分の成功は「drop out 降りる」ことから始まったのだと言って憚（はばか）らない。

英語の drop out はすでに日本語になっているが、ふつう、あまりいい意味では使われない。落第、中退、……昔はもっぱら出来のわるい学生たち向けの言葉だったが、世間一般 では、もう少し広く「落ちこぼれ」の意味でも使われてきた。それは学業であれ仕事であれ人間関係であれ、それまで自分が従っていた諸条件から「降りる」と いうことであった。その drop out の「意義」が1960年代に一変した。それは強いられて降りる（＝負ける）だけではなく、すすんで降りることをも意味し始めたのだ。drop out にそうした意味をこめ始めたのはヒッピーたちである。学校も社会も政治も、制度化されたものはすべてインチキなのだから、「真正」なものは「降りる」こと によってしか手に入らない、彼らはそう考えた。上野のはぐれ猿がそう考えていたかどうかは定かでないが、スタンフォード大のスピーチでは、スティーヴ・ ジョブズもそう考えたと言っている。しかも彼はそれを THINK DIFFERENT と、何ともスマートに言い換えている。

しかしドロップアウトするだけでは何も生まれない。だからスピーチの中で、ジョブズは drop out と対照させながら drop in on という表現も使っている。彼は、中退したあともしばらく大学内に棲息し、興に任せて授業をのぞき始めるのだが、そうしたもぐりで受講する行為を drop in on と表現しているのだ。必要や強制から解放され、体系性や一貫性や権威や「正しくあること」には目もくれず、ひたすらな興味と直観、もしかしたら「いい加減 さ」と紙一重の hungry 精神、世の成績優秀者ならさしずめ foolish と呼ぶであろう何か、それのみが彼をふらりと教室にドロップインさせる動因であった。

そうして見いだされたのがカリグラフィー calligraphy の授業であったという。書法、とでも訳すのだろうか、要するに文字のかたちや綴りを美しくするための研究のことだ。週に一度お寺から施される食事を心待ち にしていたジョブズの腹を少しも満たすものではなかったが、このときカリグラフィーに魅了され、夢中で学んだ知識と技術が、のちにマッキントッシュに美し いプロポーショナルフォントとして結実した。機能を追うことしか知らなかった当時の無粋なパソコンメーカーには、夢にも考えつかないことだったろう。

上野のはぐれ猿と御同様、スティーヴ・ジョブズがいいやつだったという話は寡聞にして知らない。たぶん上野の猿は「いいやつ」でいることがイヤ になったのだ。ジョブズは Stay Hungry, Stay Foolish. というスローガンでスピーチを締めくくっている。もちろん、このようなスローガンを信奉する男が「いいやつ」であったはずはない。

1. ニホンザル@上野動物園
   Photo by tomosuke214. Permission is granted to copy, distribute and/or modify this document under the Attribution-NonCommercial-ShareAlike 2.0 Generic (CC BY-NC-SA 2.0).
   http://freeimagefinder.com/detail/6230533971.htmlより転載
2. Japanese Macaque - 24
   Photo by Kabacchi. Permission is granted to copy, distribute and/or modify this document under the Attribution 2.0 Generic (CC BY 2.0).
   http://freeimagefinder.com/detail/5574843806.htmlより転載

* 「Apple」および「Macintosh」は、アメリカ合衆国およびその他の国々におけるApple Computer,Inc.の登録商標です。

（2011.11.17）

【第20回】SNSにもアップしています---留学生着付け講習会

商学部教授　王　　伸子　（日本語担当）

　他の先生も書いていらっしゃいますが、この原稿を書くにあたり、各言語のエッセイを拝見していると本当に面白く、世界の文化と言語の状況が分かり、つい回を追って読みふけってしまいました。で、私はというと、まず言語の紹介から始めなくてはなりませんが、「日本語教育」を担当しています。みなさんが小学校からずっと学んできた「国語」ではなく、外国語科目としての「日本語」という科目です。日本語を母語としない外国人、および帰国生を対象とした日本語を指します。発音、文法、語の用法等、一通り外国語として教科書で学びますが、現在、専修大学に学籍を持つ正規留学生は、そうした日本語の基礎教育を終え、日本留学試験という文部科学省指定の日本語試験に合格し、一般学生のみなさんとまったく同様に、教養教育科目、専門科目を履修する学生です。卒業単位となる外国語科目としては「日本語」を履修し、レポートや論文の書き方、専門書の読み方、専門的内容の聞き取りとノートのまとめ方、ゼミでの日本語による口頭発表などについて学んでいます。

　さて、その留学生と日々を過ごしている私が、ちょっとした近況を書いてみたいと思います。留学生たちは日本についていろいろと興味を持ちます。日本語の勉強を始めたきっかけは、ヨーロッパでも北米でも、そしてアジアでも、最近はアニメ、そして便利な電気製品ですが、もう一つ、日本で生活し始めて興味を持つものが「和服」です。けれども、なかなか袖を通す機会がないのも和服。その理由はお分かりだと思いますが、一つは値段と、そして着付けの難しさ。それらを少しでも克服できそうなのが浴衣です。浴衣ならば値段的に買いやすいうえに、必要な小物もそう多くないので、一応セットで購入してみる学生も少なくありません。着付けは「YouTubeで見れば大丈夫！」と言って挑戦するようですが、やはり見ただけではなかなかうまくいかず、結局、花火大会に着て行くだけでも大変だったという話をよく聞きます。1年間、古着屋で買った着物で通学した、3年生になるツワモノの男子韓国人留学生もいましたが、今は、ちょっと息切れしたようです・・・男の子たちも、着物には興味シンシンだということが最近わかりました。

　卒業式にはぜひ着物と袴で出たいという留学生も年々増え、今では多くの女子留学生が、レンタル着物で卒業式に出席しています。実は今年の卒業生のうち、数人の中国人や韓国人留学生は、自前の着物で出席したいと、日本橋の問屋まで出向き、お値打ちな振袖を見つけて仕立てました。しかし残念なことに、震災で卒業式が中止になり、本当にがっかりしていました・・・その内の一人は文学部の卒業生代表でした。この学生は、今は修士課程1年次なので、大学院の修了式こそと楽しみにしています。なにはともあれ、そうしたことがみんなに伝わり、私もほしい、私も着たいという留学生が大勢現れたので、着付けの先生に来ていただき、課外授業という形で、学内の和室で着付け講習会も行いました。まだ持っていないけれども練習したいという人には、私が着物を調達してきて、みんなで着付けの練習をしました。どんな着物があるのか、展示会にも足を運んでいろいろと調査、体験もしました。そして和の文化ということで、お能を見に行ったり、問屋さんに通ったりして、ちょっとした着物ブームが留学生の間で起きつつあります。今回は、着付け講習会の様子や、展示会で着物を着せてもらった様子を写真で紹介してみました。

　着物の部位、小物の名前もいろいろと覚えなければなりません。長襦袢、衽（おくみ）、上前、伊達締めなどなど、名前とも格闘しながら楽しく頑張っています。着付けを習いながらもスマートフォンを駆使して、途中の写真を撮りながら、その場でFacebookや、中国語版mixiの开心网（開心網）に、瞬時に写真と解説をアップすると、海外の友達からも、その日のうちに反応があり、みんな結構満足しているようです。

　来年の卒業式では、かわいい着物を着た留学生の卒業生たちが、武道館で写真を撮る姿を見られそうです。今秋からは着付けの練習の追い込み、そして年が明けてからは、また新しい着付け講習会の受講生が加わるのではないでしょうか。

* 「YouTube」は、Google Inc.の米国およびその他の国における登録商標または商標です。
* 「Facebook」は、Facebook,Inc.の米国およびその他の国における登録商標です。
* 「mixi」は株式会社ミクシィの登録商標です。
* その他、記載されている社名、製品名等は、一般に各社の商標または登録商標です。

（2011.10.26）

【第19回】 "How to die is how to live"

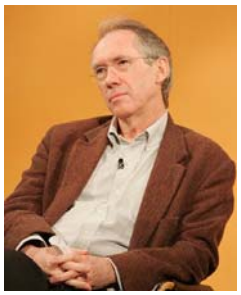
商学部准教授　小山　太一（英語担当）

時は秋。もうしばらく経てば、色づいた木々が最後のお祭りのように野山を染め、そして落葉から冬枯れへと季節は移ってゆきます。それだからというわけでもないのですが、イギリスの著名小説家であるイアン・マキューアン (『贖罪』新潮文庫、『ソーラー』新潮社ほか) が今年の初めに人間の死に方について行なった提言を思い出しました。大震災このかた、人の死について考える機会が多い年でもありましたし、ひとつその話をしましょう。

イギリスの高級紙「デイリー・テレグラフ」に、今年の初め、こんな題名の記事が載りました。“Ian McEwan: help terminally ill to die.” LL教室のコラムですから、少しだけ語学的解説を加えます。terminally ill の前には本来なら定冠詞のtheがつくはずですが、新聞の見出しではしばしばこのtheは省略されます。「the＋形容詞」って、英語でどんな意味になるんでしたっけ？　「～な人々、～なモノ」ですね。

the terminally ill とは、もはや治療の見込みがない、死が確実な病気をわずらっている人々のことです。ですから、help the terminally ill to dieとは、「終末期患者が死ぬための手助けを」という意味になります。マキューアンはそのための法整備を訴えているのです。

何だか危ない話に思えるかもしれません。治らない病気にかかったら殺されちゃうの？そんなのヤダ、という方も、みなさんの中にいるのではないでしょうか？



ですが、マキューアンが言っているのは、治らない病気にかかっている人間はみんな死ぬべきだ、などという乱暴なことではありません。人間には自殺の権利がある、という哲学的な問題でさえありません。「多大な苦痛を伴う不治の病にかかった人間は、みずからの意思によって死の時期を選ぶための法的な権利を与えられるべきだ」ということなのです。

人は誰も、他者から死を強制されることがあってはならない。だが、苦痛に満ちた死のプロセスが確実に待ち構えている場合、人生から退く時期を自分で決められたほうが、人は残された時間をポジティブに生きられる――この意見、あなたはどう思いますか？

マキューアンは言います。“How to die is really a lesson in how to live, how to live properly, right to the end.” 彼の主張に賛成する人もしない人もこれは名言と認めるだろうと思うのですが、あえて訳はつけません。それぞれに、意味を考えてみてください。

＊ 記事全文は、デイリー・テレグラフのサイトで見られます。
http://www.telegraph.co.uk/news/uknews/8319757/Ian-McEwan-help-terminally-ill-to-die.html

1. Ian McEwan, British author
   Photo by Jamesmh2006. Permission is granted to copy, distribute and/or modify this document under the Creative Commons Attribution-Sharealike License.
   http://en.wikipedia.org/wiki/Image:Ianmcewan.jpgより転載。

（2011.09.20）

【第18回】 Melbourne&Ithaca& Boston滞在記

経営学部教授　山腰　京子（英語担当）

私が初めて英語に本格的に触れたのは中学１年生の夏でした。オーストラリアの南の方にあるメルボルンという町に父の転勤で２年間滞在することになったのです。海に近く、とてものんびりとした町でした。
当時は今のように小学生からの英語教育等発達していなかったため、アルファベットぐらいしか分からないまま、いきなり現地の女子校に行くことになり不安な毎日でした。先生や友人の話はほぼわからず、宿題や課題も易しいものを与えられ、赤ちゃん扱いされるのが嫌でした。言語学では言語を幼児のように苦労なく習得できるギリギリの時期を臨界期といいますが、私はその臨界期を少し過ぎていたような気がします。それでも英語が上手になりたいという気持ちもあり、１年ほどでやっと周りが何を言っているのか大体分かるようになってきました。しかし自分の考えをある程度正確に伝えるにはほど遠く、なんとかそれができるようになったのは帰国も間近になった頃で、学校の歴史や英語の勉強は中学３年にもなると難しく量も多くなり、日本に帰りたいとばかり思っていました。
父の転勤でやむなく行ったオーストラリアでしたが、日本に帰国するとその良さが懐かしく思い出されました。広々としていて緑が多く自然に恵まれていましたし、コアラやカンガルーなど日本では見られない動物や植物を目にしたのも自分の世界が広がる貴重な体験でした。あれほど嫌だった英語についても、英語ができれば世界中の人とコミュニケーションができるのだと実感でき、そのおかげで世界中の人と話せるようになりたいという憧れをぼんやりと持ち続けるようになりました。

２度目の海外はアメリカの大学院への留学で、コーネル大学というところで必修単位を終わらせるため３年ほど滞在しました。大学はニューヨーク州にあるイサカという小さな町にありました。周囲には湖や滝がたくさんあり、とても美しい田舎町でした。
ニューヨーク州は長細い形をしていて、東の端にナイアガラの滝、西の端にマンハッタンがありますが、それを線で結んでちょうど真ん中あたりにある町です。イサカというのは英語らしくない名前ですが、付近は先住民族たちが住んでいた地域らしく、そういった名前が多く見られました（有名なのはMohawk（モホーク）でしょうか。今もおそらく少数の先住民族が住んでおり、モホーク語の研究も行われています。）このアメリカ滞在では、オーストラリアの経験から少しは慣れがあったものの、果たして英語での大学院の授業についていけるのかかなり不安でした。同期生は７人で、私以外は中国人が1人、アイスランド人が1人、後はアメリカ人が４人でした。仲間や先生に恵まれ、それほど不自由なく過ごせたのは幸いでしたが、１０月から４月までかなりの雪が降るのには参りました。近くにFinger Lakesという５つの指の形のような大きな湖がありその影響のようでしたが、アメリカ東部は思いの外雪が降ります。生まれて初めてアパートのドアの前の雪かきをしたり、雪の中を寮のランドリーまで洗濯物を運んだのも今となってはよい思い出です。

３度目の海外は昨年、在外研究の機会をいただいてアメリカ東部のボストンに娘と滞在することになりました。ボストンは緯度では函館と同じぐらいで、かなり寒く雪も多いと随分脅かされましたが、イサカ滞在を経験していたので大丈夫と思っていました。ボストンはアメリカの中でも最初にイギリスから渡ってきたピューリタン達（清教徒）が住み着いたところで、独立戦争の発端となった地でもあり、歴史が感じられる街でした。
今回は単身ではなく小学生の娘も一緒だったため、ハーバードやMITといった大学に出入りして自分の研究を進めなくてはならない一方、小学校の行事や娘の宿題、習い事にも付き合うことになりました。結果的には、研究者としての生活だけでなく、現地の小学校の子供を持つ家庭の生活を垣間見ることができ、娘の友人を通して交友範囲も広がりました。

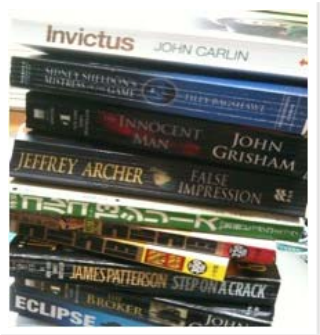
こうして３度の海外滞在を振り返ってみると、初めてのオーストラリア滞在は英語と世界への興味を持つきっかけとなり、２度目のイサカ滞在では英語も人生も鍛えられ、３度目のボストン滞在では２つの海外滞在経験を元に充実した時を過ごすことができたように思います。皆さんも英語を通して世界を学ぶことで、視野が広がり人生も豊かになるのではないでしょうか。英語と楽しく付き合ってみませんか。

1. Flinders Street Train Station Melbourne, Victoria.
   Photo by Adam.J.W.C.. Permission: Dual-licensed under the GFDL and CC-By-SA-2.5,
   http://upload.wikimedia.org/wikipedia/commons/thumb/0/07/Flinders_street_train_station_melbourne.jpg
   より転載。
2. Clocktower cornell.
   Photo by Ivytsoi. Permission is granted to copy, distribute and/or modify this document under the terms of the GNU Free Documentation License, Version 1.2 or any later version published by the Free Software Foundation.
   http://upload.wikimedia.org/wikipedia/commons/1/19/Clocktower_cornell.jpgより転載。
3. Faneuil Hall, en:Boston, Massachusetts.
   Photo by Daderot. Permission is granted to copy, distribute and/or modify this document under the terms of the GNU Free Documentation License, Version 1.2 or any later version published by the Free Software Foundation.
   http://upload.wikimedia.org/wikipedia/commons/b/b6/Faneuil_Hall_Boston_Massachusetts.JPGより転載。
4. A view of downtown Boston, Massachusetts taken in August of 2006.
   Photo by Spinnick597. Permission is granted to copy, distribute and/or modify this document under the Creative Commons Attribution-Sharealike License.
   http://upload.wikimedia.org/wikipedia/commons/thumb/6/63/DowntownBoston.jpg より転載。

（2011.07.25）

【第17回】 しわづけ読書

文学部教授　田邉　祐司（英語担当）



古書店の本棚に並ぶペーパーバックスの背表紙をながめていると、ヘンな想像力がかき立てられる。背表紙に「縦じわ」ひとつ入っていないペーパーバックスは途中で放棄されたか、あきらめられたものだろう。逆に、しわが幾重にもでき、背表紙が中央から弓なりにそったものは、from cover to coverで読まれた本であろう。日本人が処分したペーパーバックスには前者が、母語話者がお役御免にしたものは後者が多いと勝手ににらんでいる。

本の「しわ」で思い出されるのが、今をさかのぼることウン十年前、高校で教えていたときに出会った「英語の師匠」のことである。師匠は日本人ではあったが、母語話者並の「しわづけ読書」の達人だった。彼の読書には独特の流儀があった。親指でページの片隅を何度もめくることでリズムを刻みながら、読まれるのである。こすれて「かさかさ」という音がする。その「かさかさ」とともに、ものすごいスピードで文に眼を走らされる。やがて一定のまとまりが過ぎると、グッと背表紙を押しつけるように読み続けられた。

１週間に１～２冊のペースだったろうか、いや、もっとだったのかもしれない。読まれるペーパーバックスは、英語はもとより各国語にわたっていた。フランス語、ドイツ語、ギリシア語、イタリア語、スペイン語、スエーデン語、etc…。どこから調達されてくるのか、覚えきれないほどの西欧言語のオンパレードだった。

こうして、読んだ、しわ入りの本を「あんた、読むかね？」と言いながらポンと手渡されたものであった。高校の職員室の隣の席にそんな人がすわっていたということは運命だった。いただいたわけなので、もらいっぱなしはできなかった。忙しい中でも時間を見つけてせめて英語のペーパーバックスだけはと思い、必死に読んだ。

師匠の英語力はそのあたりの英語母語話者を蹴散らすほどのものだった。その源泉がこのペーパーバックスのしわづけ読書であった。そう、彼の英語は本のしわから生まれたものだった。英語力を維持し、確固たるものにするには、絶え間のないinputが必要である。ペーパーバックスのしわづけ読書は、日本というEFL（English as a Foreign Language）環境では理にかなった手段だった。思えばこうした師匠のしわ読みは大学出たとたん、「先生」と呼ばれるようになり、校務分掌やクラブ活動で、いつの間にか英語の勉強を怠っていた新米教師への警鐘だったのかもしれない。

こうしてエラそうに書きながらも、はっきりしていることがある。今のわたしの英語のしわは、あの時の師匠の十万分の一、いや、百万分の一にも及ばないということである。あれから30年近くが経った。寄る年波に気づきながらも、1週間に1度の（古）書店巡りと、1週間に1冊の英語しわづけ読書。それだけは欠かせない。死ぬまで師匠には追いつけないとわかっていても...。

（2011.05.16）

【第16回】 燃える鉛筆

商学部教授　下澤　和義（フランス語担当）

いまわたしがこの文章を書いているのは「東日本大震災」の発生から約一カ月半後のことである。この間わが国にはあらゆる意味で未曾有の変化が起きており、それは現在でも続いている。

あるいはこのコラムでは、そのような状況と関係なく外国語教育のテーマについて書くべきかもしれない。だが、すでにわたしたち自身の生き方があの日をさかいに後戻りのきかないかたちで「前-後」にわかたれてしまっており、それを無視することはすくなくともいまはまだ困難であるように思われる。

たとえばこの一カ月半のあいだに日本のメディアでは、いくつかの耳慣れない専門用語がとびかうようになっている。そのひとつが「ベクレル」Bqという放射能の単位(放射性核種の壊変数が1秒につき1個であるときの放射能の量が1Bq)であるが、福島原発事故がなければこの専門用語はこれほど人口に膾炙しなかったにちがいない。

いまやわたしたちの生死の指標になりつつあるこの用語は、自然放射能の発見によってノーベル物理学賞を授与されたフランス人の物理学者アントワーヌ・アンリ・ベクレル(Antoine Henri Becquerel, 1852-1908)の名前にちなんだものである。ベクレルは同じく物理学者であった父のあとを継いで、1892年にパリの自然史博物館物理学教授職についたが、1896年3月1日に彼が放射能に関する発表をしたキュヴィエ館は、今日でも博物館の施設のひとつとして五区の植物園内に残されている。

この春休みに仏滞在中であったわたしは、恐竜やクジラの骨の展示館を幼い息子に見せてやるために同博物館を訪れたことがある。原爆投下とその後の日本の復興、スリーマイルやチェルノブイリ、そしてフランスがいまや世界に冠たる原発大国となり、その現大統領がエネルギー政策の思惑をひめつつ他国に先駆けて被災時の日本を訪問したことなども、あの植物園の一角から始まったのかと考えると、あらためて複雑な感情にとらえられる。

罹災した日から、フランスの各種メディアをはじめIRSN, CRIIRADのような専門機関から情報収集する機会が増えたため、これまでなじみのなかった分野の語彙にもずいぶん出会った。たとえば中級の教科書にあった会話の教材で「原子力の」という形容詞、nucléaire は以前に何度か講義で教えた経験もあったが、「発電所」をあらわすcentrale はまだその機会に恵まれていない単語である。語尾にeのつかないcentral という語は、「中心の」という意味の形容詞だったり、「制御室」という意味の男性名詞だったりするが、語尾に母音がつく女性名詞のほうは、さらに水力、火力、太陽などの動力源に関する形容詞を添えて、それぞれの種類の発電所を指すのである。

実際にフランス社会では、原子力発電が77%、水力・風力・太陽光による発電が合わせて12%、火力発電が11%で、原子力が最も高い比率を占めている(2009年の在日仏大使館資料による)。国内では58基の原子力発電所が稼働しており、昨今のニュースではnucléaire を省いてcentrale だけで原発を指すこともめずらしくない。

また、英語ならaftershockという「余震」がフランス語ではréplique になることは、この機会に初めて知った。これは文学の分野では芝居の「せりふ」という意味でしばしばお目にかかる名詞だが、もともと「応答」「言い返し」という意味を含んでいるので、本震に対する返答という意味合いがあるのかもしれない。そのほかにも、マグニチュードのことを米の地震学者の名にちなんでl'échelle de Richter (リヒター・スケール)と言ったりするなど、ところ変われば品変わる例は枚挙にいとまがない。

そのような表現のひとつに、crayon combustible がある。combustible という形容詞の意味は「可燃性の」であるし、crayon は日本の大学一年生なら必ず習う「鉛筆」という名詞であるから、一瞬、燃えやすい鉛筆か何かを想像するが、これは「燃料棒」を指す専門用語である。また「メルトダウン」は、そのままの英語を使わないで、fusion du cœur d'un réacteur nucléaire (「原子炉の炉心の溶融」)と仏訳するようだが、これはベクレルの国として定義の厳密さを求めるからなのか、それともウォークマンを「ぶらぶら歩きするヒト」baladeur と仏訳したがるような純粋主義いのせいなのだろうか。

以上のようなことを書きつづってきたのは、私の専攻分野がフランス語となじみが深かったせいもあるが、原子力の分野では日仏双方が良きにつけ悪しきにつけ不可分な絆で結ばれているためでもある。

しかしまた、日本語にせよフランス語にせよ、あるいは、いまこの惑星で使われているいかなる言語にせよ、総じて「ことば」というものが通じなくなるような「他者」に向けて「危険」というメッセージを発しなければならないのが、ベクレルの発見した物理現象のタイムスケールであることを忘れてはならないだろう。たとえばフィンランドが建設している世界初の最終処分場では、未知の侵入者にたいして立ち入り禁止をあらわす標識にフィンランド語ではなく絵文字が使われている。地の底へ埋めるべき物質の持つとされる力は、欧州の基準によると、生物にとって安全な水準に下がるまで最低でも10万年を要するとされているからである。

冒頭にも書いたように震災から一カ月半が過ぎたとはいえ、昨晩も千葉県東方沖で6,0 sur l'échelle de Richter という規模のrépliqueがあったばかりだし、この一カ月半は、これから半減期までに流れていくであろう気の遠くなるような時間のほんの序章にすぎない。ボルヘスの砂の本にも似たその終章を書き終えることのできる者は、人類の歴史の果つるところでさえ遂に登場しないかもしれないのだ。

では、この無限とも思われる隔たりをまえにしたとき、「ことば」は無力なのだろうか。いや、それでもなおわたしたちは書きつづける存在なのではあるまいか。すくなくとも世界に「ことば」というものがあるかぎり。たとえ鉛筆が大いなる炎に包まれていようとも、書くことがわたしたちの希望をつむぐかぎりは――。

被災により亡くなられたかたがたのご冥福をお祈り申し上げるとともに、いまなお被災による苦しみに耐えているかたがたのために一日も早い復興がなされることを心より願いつつ。

*「ウォークマン」は、ソニー株式会社の日本国およびその他の国における登録商標または商標です。

（2011.04.25）

専修大学LL研究室 (http://www.senshu-u.ac.jp/libif/lld/)
〒214-8580 神奈川県川崎市多摩区東三田2-1-1
TEL:044-911-0502 FAX:044-900-7842

Copyright(C) 2000-2014 Senshu University All Rights Reserved.